

イ列構音障害の改善に要した時間とその要因について

○ 梅村 正俊
(上山市立上山小学校)

長澤 泰子
(国立特殊教育総合研究所)

I 目的

同じイ列構音障害でも、子どもの性格や指導への意欲また誤り音やその誤り方等によってその改善に要する時間に差のあることは、臨床上経験することである。

今回は、学年をそろえ、短期間で指導を終了した者と長期に渡って指導を要した者とを一組とし、構音改善に関わる幾つかの要因を検討する。

II 方法

1 対象児

1学年から3学年までのイ列構音障害児各2名である。そのうち1名は短期間で指導を終了した者(短期群)、他の1名は長期間の指導を要した者(長期群)である。全て、聴力検査及び知能検査において問題は見られていない。

対象児の生育歴・既往歴・誤り音及び誤り方等は、表1に示した。

指導は、いずれの対象児も1セッション40~45分間で週2セッション行われた。

2 検討項目及び評価方法

- (1) 舌の動き; 本学会20回大会の報告において正常児とイ列構音障害児の随意運動機能のうち両者間に差の見られた舌の動きに関する7項目の観点から、4段階の総合評価とした。
- (2) 誤り音に対する弁別力; [1 誤音について自己弁別が良くできる 2 自己弁別できないこともある 3 他者弁別は良いが自己弁別が難しい 4 他者弁別・自己弁別とも悪い] の4段階評価とした。
- (3) 課題に対する注意集中度; [1 いつでも集中できる 2 だいたい集中できる 3 好きなことだけに集中できる 4 いつも集中しない] の4段階評価とした。
- (4) コミュニケーション態度; [1 自発的にもよく話し、落ち着いて応答できる 2 よく話すか時には人の話を聞いていないことがある 3 会話量は多くないが必要に応じて話ができる 4 自発的な会話も少なく答える時も口数が少ない] の4段階評価とした。
- (5) 本児の指導への意欲; [1 発音の誤りをしっかり

表1 対象児の概要

(学年及び年齢は指導開始時)

		1 学 年	2 学 年	3 学 年	
短 期 群	1 児童(性別)年齢	1-S児(女) 7 ⁻⁵	2-S児(男) 8 ⁻⁰	3-S児(女) 8 ⁻⁶	
	2 家族	叔・父・母・叔	叔・母・父・母・叔・弟	叔・父・母・兄・姉・叔	
	3 生育歴・既往歴	特記事項無し	特記事項無し	5歳の時、交通事故で左口唇を切り数回縫っている	
	4 イ列音 の 構音障害	①誤り音	ki, gi, fi, fj	ki, gi, ji, f, fj, tj, di, dz, ti	ki, kj, gi, gj, fi, f, fj, tj, di, dz, fi, fi
		②誤り方	右側性	左側性	右側性
	5 その他の音の誤り	無し	無し	齧/ke, ge、齧/s, z, t, d	
6 セッション数(指導期間)	13(3か月)	21(4か月)	37(11か月)		
長 期 群	1 児童(性別)年齢	1-L児(女) 7 ⁻¹	2-L児(男) 7 ⁻¹¹	3-L児(男) 8 ⁻¹⁰	
	2 家族	叔・父・母・叔・妹	父・母・兄・叔	父・母・叔・妹	
	3 生育歴・既往歴	特記事項無し	特記事項無し	特記事項無し	
	4 イ列音 の 構音障害	①誤り音	ki, kj, gi, gj, fi, f, fj, tj, di, dz, f	ki, kj, gi, gj, fi, f, fj, tj, di, dz, fi, fj, fi, f	ki, kj, gi, gj, fi, f, fj, tj, di, dz, fi, fj, fi, f
		②誤り方	右側性	左側性	左側性
	5 その他の音の誤り	齧/s, z	齧/s, z	齧/ke, ge	
6 セッション数(指導期間)	57(12か月)	107(25か月)	79(18か月)		

自覚し直そうと努力している・自発的に通級する
 2 自覚はしているが直すことにあまり熱心でない・楽しんで通級する 3 指導時間内だけは練習するが日常的には発音が誤ることに無頓着 4 自覚はしているが直すことに熱心でなく、できれば通級したくない] の4段階評価とした。

(6) 家族の指導への意欲；[1 早く直ったほうが良いと考え熱心に通級させる 2 早く直ったほうが良いとは考えているが時々通級を忘れることがある 3 直るものなら直ったほうがいいたろう程度に考えている 4 たかが発音と考え、学級担任の説得により通級させている] の4段階評価とした。

III 結果及び考察

1 舌の動きについて (図1に示す)

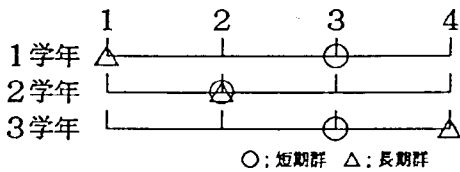


図1 舌の動き

1 学年においては短期群児が劣っていた。2・3 学年では、ほとんど差はない。

2 誤り音に対する弁別力 (図2に示す)

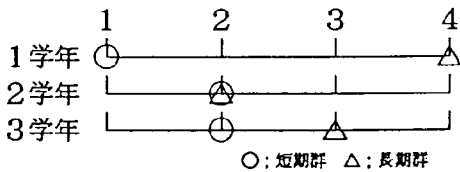


図2 誤り音に対する弁別力

1-S児は、一度覚えた正しい構音は会話途中でもうっかり誤るとすぐ言い直すなどの態度が見られたが、1-L児は、誤ってもほとんど無頓着でいることが多かった。2・3 学年では、ほとんど差は見られない。

3 課題に対する注意集中度 (図3に示す)

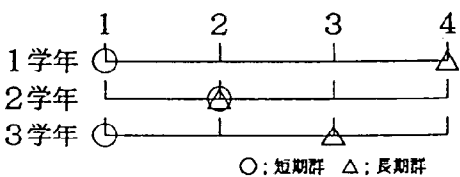


図3 課題に対する注意集中度

1-S児・3-S児とも課題ごとに意欲を持って取り組む姿勢が見られたが、1-L児は、学校であった出来事など課題とは違ったことを話しかけてきたり課題にのるまでに時間がかかることが多かった。

4 コミュニケーション態度 (図4に示す)

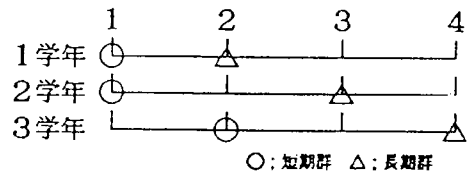


図4 コミュニケーション態度

1-S児・2-S児とも落ち着いた対応がとれ、詳しく話そうとするなどコミュニケーション関係が良くとれた。

5 本児の指導への意欲 (図5に示す)

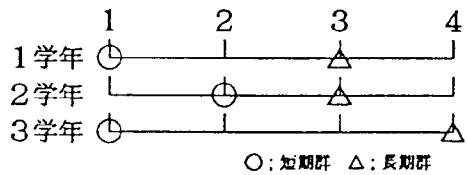


図5 本児の指導への意欲

1-S児・3-S児は、構音指導の際、自ら音の出し方を工夫するなどの姿勢が見られたが、長期群児ではそれ等が見られることは少なかった。また、短期群児は、一度正しく言えた構音を家庭で練習したり、会話の時も気をつけるなど自ら直そうと努めていた。長期群児は、セッション中の練習が主であった。

6 家族の指導への意欲 (図6に示す)

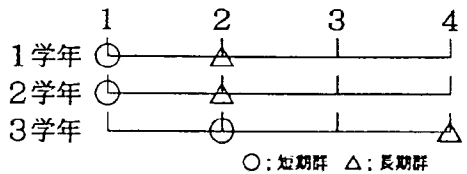


図6 家族の指導への意欲

短期群の家族の方が全般的に指導への意欲が高い。その意欲も短期群の子ども達に反映し改善への意欲を高めていると思われる。

IV まとめ

- 1 舌の動きでは、1 学年のみ長期群児が優れていたが、各項目の全般において短期群の方が長期群より高い評価を得た。
- 2 指導期間の長短は、誤り音数の多少や誤り方等にも当然左右されるが、構音指導の外的条件ともされる指導への意欲や課題へ取り組む姿勢なども大きな要因となることが示され、指導における教育的配慮の重要性があらためて認められた。

〈参考文献〉

梅村正俊・斎藤美磨・長澤泰子 1982 構音と随意運動機能の関係についてⅡ 日特教第20回大会論文集